



遠隔授業のユニバーサルデザイン

研究代表者：佐々木銀河（筑波大学人間系）

共同研究者：竹田 一則（筑波大学人間系）

藤原 あや（筑波大学人間系）

岡野 由実（人間系）

鶴井 孝大（人間系）

山森 一希（人間系）

1) 研究期間

短期集中型（2020年5月～10月）

2) 応募時の目的・目標・達成イメージなど

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大に伴い、8割以上の大学等ではオンラインによる授業（以下、遠隔授業）の実施又は検討が進められています（文部科学省, 2020）。遠隔授業では障害学生にとって物理的な移動を伴わないこと等のメリットがあります。一方で、視覚情報や音声情報が通常講義よりも煩雑となりやすいため、視覚・聴覚等の障害学生においては配慮を要する点があります。また、遠隔授業を行う授業担当教員側においても従来の授業スタイルからの変容を求められ、障害学生等のマイノリティ学生への配慮対応まで準備することが難しいという実情が国際的に見ても存在しています。そこで、本研究では遠隔授業を経験した障害学生と授業担当教員を対象に遠隔授業のアクセシビリティ調査を行い、対面授業と比べて遠隔授業の利点と課題を明らかにしました。

3) 本プログラムで実施した研究の内容と成果

筑波大学ダイバーシティ・アクセシビリティ・キャリアセンター（以下、DACセンター）の協力を得て、春学期 B モジュール試験期間終了後の7月上旬にWEBによるアクセシビリティ調査を実施しました。障害学生向けの調査では学生の障害分類に応じて、最も受講しやすい授業と受講しにくかった授業を調べ、授業担当教員向けの調査では授業実施の負担感等を調べました。WEB調査により、同センターの障害学生支援を使用する障害学生25名および障害学生が春学期に受講した授業の担当教員72名より回答を得ました。調査結果の一部として、障害学生および授業担当教員における遠隔授業の評価を以下に示します。

障害学生へのアンケート (N=25)
「今後も大学での授業を遠隔形式で受けたいですか？」

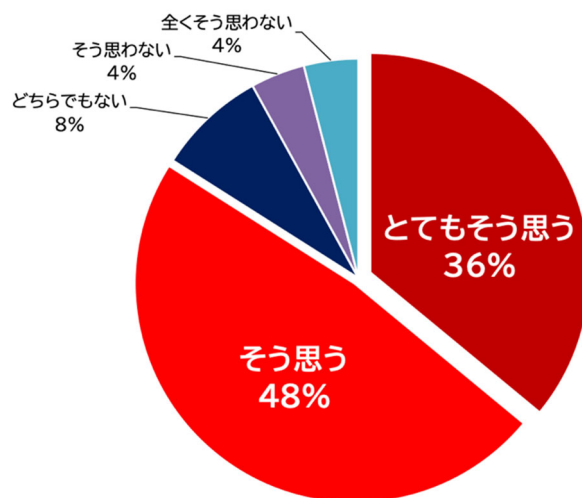


図1 障害学生において今後も遠隔授業を希望する割合

図1に示す通り、障害学生において今後も遠隔授業を受けたいと思う割合は約84%と非常に高い割合であることが分かりました。項目が異なるため単純比較することは難しいですが、一般大学生を対象にした調査（全国大学生生活協同組合連合会，2020）において、対面授業と比べた場合に、今後も遠隔授業を続けてほしいと回答した割合が約42%であることを踏まえると、障害学生において遠隔授業の評価がとて高かったことが伺えます。その理由としては、「授業資料をデータで提供してくれること（視覚障害）」、「動画教材に字幕がつけられていたこと（聴覚障害）」、「移動をしなくても良いこと（運動障害）」、「学習管理システム上で課題提出状況が管理できること（発達障害）」、「動画教材を好きな時間に繰り返し確認できること（発達障害）」、「会話が苦手でもチャット機能が利用できること（精神障害）」などが挙げられていました。この結果に関しては、回答者が授業など修学上の支援を受けている障害学生であることを考慮すると、遠隔授業なら何でも受講しやすいわけではなく、それぞれの障害に応じた支援を受け、遠隔授業で用いられるシステム等の機能・利点を活用できた結果と言えるかもしれません。しかしながら、COVID-19の拡大により必要を迫られた遠隔授業という形態には、障害のある学生が障害のない学生と同等に授業にアクセスできる可能性が秘められていることが伺えます。一方で、授業担当教員ではどうでしょうか？

図2に示す通り、障害学生が受講する授業の担当教員においては、「どちらでもない」という中立的な回答が最も多く、否定的な回答と合わせると約75%において、障害学生が受講するとしても授業を遠隔で実施することについては肯定的ではないという結果になりました。その理由としては、遠隔授業そのものの課題が影響していると考えられます。例えば、演習や実習科目ではCOVID-19の影響により遠隔授業となった科目も多くありましたが、科目の性質上、実技や実地での学びが必要不可欠な要素となっている場合もあります。また、講義形式の科目であっても、遠隔授業では受講生側の反応を即時的につかむことが極めて困難であり、授業進行における新たな困難が生じていたことも結果に影響していたと考えられます。加えて、本調査は日本の障害学生支援における拠点

校の1つである筑波大学を対象としていたことを踏まえると、障害のある学生に対する修学上の支援や合理的配慮の提供について、十分な体制が整っていない大学では1人1人の教員に求められる負担もより大きくなる可能性が考えられます。

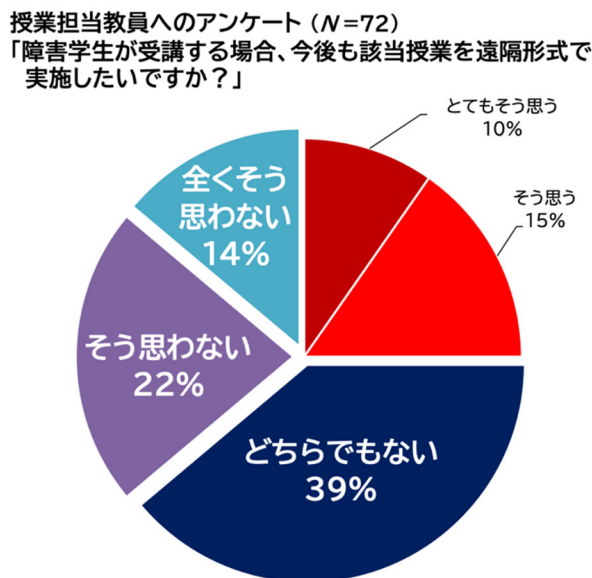


図2 授業担当教員において障害学生が受講する場合、今後も遠隔授業を希望する割合

本研究の結果から障害学生にとって遠隔授業という形態は、適切な対応が行われることを前提とした上で授業へのアクセシビリティを高める可能性が示唆されました。一方で、授業担当教員側では遠隔授業に肯定的ではない場合も多いことが示されており、本研究の結果から、以下の3つの課題が考えられます。1つ目に遠隔授業で用いられるシステム等のアクセシビリティ関連機能の改善、2つ目にアクセシビリティ関連機能を活用するために必要な知識・技術の提供、3つ目に授業の到達目標および受講生の障害や特性に応じて授業受講形態を柔軟に調整できる制度面の整備です。これらの課題を解決する研究・実践を進めることにより、本研究で示された障害学生と授業担当教員間のギャップを埋め、with/post コロナ時代の新たな学習のユニバーサルデザイン化につなげていくことが期待されます。

4) 研究業績・研究広報

- Sasaki et al. (2020) Research on new methods of learning for students with disabilities in distance learning. *Tsukuba Global Science Week 2020 Digital Poster Session*.
- 筑波大学新聞 2020年5月25日
障害学生 まなびやすく：遠隔授業の指針発表 DAC センター
<https://www.tsukuba.ac.jp/public/newspaper/pdf-pr/356.pdf>
- 教育学術新聞 2020年6月24日
オンライン授業における発達障害学生への支援：筑波大学 DAC センター 新たな学びへのアクセスの鍵に



- 読売新聞 2020年7月3日
オンライン授業 障害者に配慮を
<https://www.yomiuri.co.jp/kyoiku/kyoiku/20200702-OYT8T50045/>
- 筑波大学新聞 2020年10月1日
オンライン授業 障害学生対応の経験共有 DAC 研修会 学内外から 392 人参加
<https://www.tsukuba.ac.jp/public/newspaper/pdf-pr/358.pdf>
- 令和2年度第4回筑波大学FD/SD研修会 2020年7月29日
「遠隔授業におけるアクセシビリティを考える」
<https://dac.tsukuba.ac.jp/shien/20200731-1/>

5) 最新の成果・情報

筑波大学「知」活用プログラムウェブサイト>佐々木銀河

https://www.osi.tsukuba.ac.jp/fight_covid19/sasaki/

インタビュー記事

https://www.osi.tsukuba.ac.jp/fight_covid19_interview/sasaki/